

一般枠

【長野県協議会】

レクリエーション活動における「隙間」を解決するためのアクティビティ補助ロボット

委員長：大月 肇

プロジェクトコーディネーター：ニーズ 中林 美奈子
シーズ 浜田 利満



1) 協議会の概要

協議会の特性（得意分野や検討フィールド等の特徴）

介護老人保健施設や通所リハビリ、地域包括ケア病棟において、日頃より介護スタッフと関わりを持つ作業療法士が中心となり、現場の意見を吸い上げ、経験豊富なプロジェクトコーディネーターの情報を得ながら、質の高い介護とは？介護スタッフは何を望んでいるのだろうか？を具体化していった。

生活環境への働きかけ、特に集団を用いた取り組みは作業療法における重要な治療手段の一つである。活動への参加は生活リズムを作り、他者との関わりは人を癒し、またその活動を通じて社会参加へと促していくことができる。しかし、作業療法士のほとんどが在籍する一般病院においては、診療報酬上個別対応が主であり実施が難しい。今回は、介護現場でのレクリエーション活動に対するロボットの活用を通じて、作業療法士としても集団活動を考える機会となった。

協議会のメンバー構成（概要）

ニーズ委員

宮永茂行（老健いずみの 作業療法士） / 近藤博幸（老健ひまわり 作業療法士）

シーズ委員

板井志郎（筑波学院大学 経営情報学部）

協力:各施設介護スタッフ

- 介護療養型老人保健施設 いずみの / ■ 大西会老人保健施設 ひまわり
- 飯山赤十字病院包括ケア病棟 & 通所リハビリテーション ふきのとう

1)協議会の概要：開催概要

項目	開催日時	開催場所	出席者
第1回協議会	2018年9月19日 13:00~15:30	飯山赤十字病院	ニーズ側：4人 シーズ側：1人 計：5人
第2回協議会	2018年12月8日 13:00~18:00	飯山赤十字病院	ニーズ側：3人 シーズ側：1人 計：4人
第3回協議会	2019年2月16日 13:00~16:00	飯山赤十字病院	ニーズ側：3人 シーズ側：2人 計：5人
第1回WG	2018/8/30 18:30~21:50	飯山赤十字病院	ニーズ側：3人
第2回WG	2018/11/16 18:00~21:00	老健 ひまわり	ニーズ側：3人
第3回WG	2019/2/8 18:30~21:30	老健 ひまわり	ニーズ側：3人

2) ニーズの明確化：ニーズ調査・分析

ニーズ調査の実施概要（先ずは現場観察より）

介護現場はこうあったらいいな・・・という姿、世界観のもと

作業療法士が関わる中で、何が課題と思われるか？



①リスクマネジメント的視点：転倒・転落の予防策として有効か？

②ADL的な視点：最も多くの注目を集める分野であり重要性も高い

③生活環境の視点：日常的なプログラムとして取り入れられている。レク活動の展開に有効か？

●生活環境への働きかけ、特に集団を用いた取り組みは作業療法における重要な治療手段の一つである。活動への参加は生活リズムを作り、他者との関わりは人を癒し、またその活動を通じて社会参加へと促していくことができる。しかし、最近、作業療法の現場において、集団活動がしっかり行えているだろうか？これは自分たちの課題でもある。

レクリエーションで行こう！

※以下レクリエーションを「レク」、介護スタッフを「スタッフ」と表現する

2) ニーズの明確化：ニーズ調査・分析

ニーズ調査の実施概要

■ 調査方法、整理・分析の手法

調査方法：アンケート（項目に沿い自由記述）

対象者：レク業務に携わるスタッフ

協力者 20名

調査項目

- ①レク活動についてどう考えていますか？
- ②実施する上での不具合は何ですか？



内容を分析

2) ニーズの明確化：ニーズ調査・分析

ニーズ調査の実施概要

■ ニーズ調査のまとめ

①レク活動に対する考え？ 「入所生活の中で自分らしさを取り戻してほしい」「能力を引き出したい」「考えたり楽しんだりしてもらいたい」「活動性維持の視点、人的交流の視点からも重要」「レクは楽しい」など
利用者にとって活動性維持の視点・人的交流の視点からも大変重要な役割を担っていると考えている。また、その人らしさを引き出し、QOLへの刺激となるように心がけて提供している。

②実施する上での不具合？ 「少人数のスタッフで対応」「声掛けや誘導に時間がかかる」「楽器など道具が使えない」「利用者の知っている歌が分からない」「下調べに時間がかかる」など
レクの現場は、少人数の中で何役もこなさなくていけない悩みを抱えている。活動への誘導や声掛けに時間がかかり、待たせてしまうこともある。活動の進行については、話題提供や体操のデモ、歌唱時の伴奏などといった準備や個々の技量的負担も感じている。

- レク活動に対しスタッフは、重要な介護サービスとして位置づけている。
- 少人数で行わなければならない現状があり、活動以外の時間がかかったり、活動の進行に関しても負担に感じている。 ⇒ 思いはあっても利用者に十分に寄り添えていない。

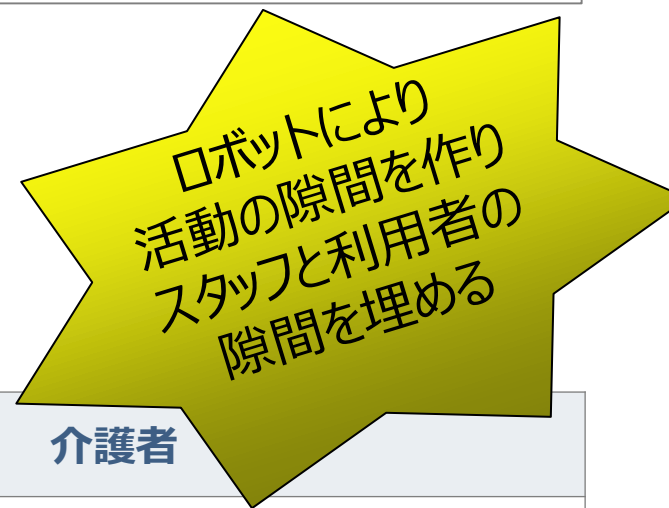
2)ニーズの明確化：課題分析

解決すべき課題

施設の中で様々な業務をこなす介護スタッフ。多くのスタッフで構成されることでの技術的な振れ幅、経営的にも定員以上のスタッフを抱えることのできない現状の中においても、**スタッフの働き甲斐は、「利用者に関わる」ことにある。**利用者のいきいきした生活を支援すること、またその場に寄り添うことにある。そして、レク活動については、**利用者にとって活動性維持の視点・人的交流の視点からも大変重要な役割を担っていると考えている。**しかし、現場はひとりで何役もこなさなくてはならない、利用者に関わるせっきくの機会であっても十分に対応できていない現状がある。また、レク活動におけるロボット開発も近年進められてきているが、そのほとんどが利用者とロボット間で完結してしまうものが多くみられる。**「利用者に関わる」ことをロボットに任せては、スタッフの専門職としてのモチベーションを低下させ、利用者へのサービス低下、活動におけるお互いの満足感の低下につながりかねない。**

解決した時のあるべき姿・到達目標

- レク活動の流れの中で、その補助的な働きをロボットに行わせることで、スムーズな活動の進行が行え、スタッフの**「利用者に関わる」機会が増える。**
- スタッフが利用者に関わる機会が増えることにより、**お互いの活動が高まり、満足感のあるレクを体験することができる。**



	被介護者	介護者
対象者	■ 施設などを利用する高齢者	■ レク活動を行うスタッフ (※活動に不得手なスタッフも対象としたい)

3) 課題解決のための検討 : 課題解決のための機器 (新規ロボット等) のアイデア①

隙間を埋めるロボットのイメージ

～レク活動の流れでのロボット活用とスタッフの関わり～

①参加への誘導や声掛けによる促しを行う

※スタッフは移動・移乗・準備等介助に集中できる

②集合から開始までの場をつなぐ活動を行う

※スタッフは少数でも利用者に目を配ることができる

③日付の確認や時の話題を提供する

※スタッフは利用者の傍らにいて、話題の展開を図る

④体操のデモができる

※スタッフは利用者の傍らにいて、運動の促しができる

⑤歌唱活動のリードができる

※スタッフは利用者の傍らにいて、活動の促しができる

⑥解散から帰宅までの場をつなぐ活動を行う

※スタッフは少数でも利用者に目を配ることができる

☆ 既製品A・既製品Bの利用例

皆さんこんにちは！今日は2月24日、
これからレクリエーションを始めます・・・

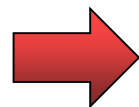
次はAIBOくんに合わせて
体操しましょう！

③④⑤動作確認済

既製品
A

既製品
B

スタッフの関わりの増



スタッフの満足感 ↑ 利用者の満足感 ↑

3) 課題解決のための検討 : 課題解決のための機器 (新規ロボット等) のアイデア②

項目	概要
必要な機能・技術	<p>活動に関するデモ機能等</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ オリエンテーション：日付の確認、時の話題の提供機能 ■ 体操活動：活動の声掛けと視覚的な動作の促し ■ 歌唱活動：歌詞の朗読や解説機能／伴奏や一緒に歌う機能 ■ 親しみやすい形状、大きさ、音声、レクにおける基本的な動作機能 ■ 移動機能（利用者への声掛けや誘導を移動しながら行う） ■ スタッフの機器操作技能（操作方法と活用マニュアル）
新規ロボット等導入による課題解決の評価方法	<p>スタッフの隙間に関する評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 利用者に関わる時間・回数（声掛け・触れる・顔を見る）・表情の観察 ■ スタッフの満足度 <p>利用者の隙間に関する評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 何もしないでいる待ち時間 ■ 自発的な活動の回数（話しかける・触れる・笑う）・表情の観察 ■ 利用者の満足度
既存の機器、類似機器との相違点・優位性	<ul style="list-style-type: none"> ■ 今まで、レク活動を完結させるコンセプトの中での開発はされているし、実用的に用いられているケースも少なくない。しかし、スタッフと利用者を強く結びつけるためにロボットを活用するというコンセプト（隙間を埋める）は、今後のロボット活用に重要なキーワードとなり得る。

4)今年度の振り返り

■介護施設で導入されているレク対応型のロボットのほとんどは、スタッフの代わりに何かをすることた身代わりの発想で利用されるケースが多くみられる。しかし、介護業務の醍醐味は対象者と関わることにあり、その業務を奪われたら、スタッフにとっての「意味のある仕事」ではなくなってしまい、モチベーションも維持できないであろう。今回はレク活動に焦点を当てたが、現状は人員不足の中で、満足のいくサービスができていない状況にあることが悩みとなっていた。そのような中、ロボットを活用することでの「活動の隙間」に対する検討を行った。これは、単にレク活動にとどまらず、施設生活のどのシーンにも当てはまる課題であると思われる。あくまで、ロボットの利用は補助的に考えたいとした。

■プロジェクトコーディネーターからは、様々なデマンドから本質的なニーズを抽出すること、ロボットを利用することでの利点や欠点、特に人に関わる専門職としての倫理観などのアドバイスを頂き、日頃の業務を再確認する機会ともなった。また、ロボット開発・研究における最新情報などもお聞きし、実際に既製品のロボットを使った実験を体験する中で、医療や介護現場でのロボットの活用は今後の重要課題だと身近なこととして認識することができた。

今回協議会でのキーワード／テーマは「隙間」であった。作業療法的には、「遊び」とも変換されるであろう言葉だ。今年度はかなりタイトなスケジュールであったため、協会からも様々な提案や指示を頂いた。しかし、自由に考える「隙間」と「遊び心」をプロジェクトコーディネーターから頂いたのは大きかった。

■最後に、今回は介護現場におけるロボットの活用を検討していく中で、今までの「介護」に変化をもたらすということを考えてきたが、同時に作業療法の技術的な場面における「活用」と「変化」についての可能性についても考える機会となった。